令和2年11月1日発行第61巻第11号通巻689号　毎月1回1日発行

COMMERCIAL PHOTO
2020/11
コマーシャル・フォト

別冊付録
2020-2021
CM・映像
ディレクターズ
ファイル

フォトグラファーの
撮影メモ

入稿データ作りの
指南書

フォトグラファー特集
磯部昭子

FEATURE
浅田政志

CINE material

映画の制作現場を毎回紹介するこのコーナー。今回紹介するのは手塚 眞監督の最新作、『ばるぼら』。撮影監督クリストファー・ドイルの現場を、姫田伸也プロデューサーに語ってもらった。

VOL.37 『ばるぼら』

11月20日(金)より シネマート新宿、ユーロスペースほか全国公開 配給：イオンエンターテイメント ©2019『ばるぼら』製作委員会 R15+

ドイルの魅力は、境界線のないところ

INTERVIEW 姫田伸也（プロデューサー）

禁断の愛とミステリー、芸術とエロス、オカルティズムなどタブーに挑戦した手塚治虫の大人向け漫画『ばるぼら』。その原作を実写化し、世界各国の映画祭で反響を呼んでいる本作がついに日本で凱旋公開となる。監督は映像美を高く評価される手塚眞、撮影監督には『恋する惑星』『楽園の瑕』のクリストファー・ドイル。耽美派小説家・美倉洋介を演じる稲垣吾郎と、謎の女・ばるぼらを演じる二階堂ふみが本作で初共演。甘美で退廃的な異世界に全身全霊で臨む。

――撮影監督にクリストファー・ドイルを起用した理由。

本作はもともと手塚監督が10年以上前から持ち歩いていた企画で、監督が何度か映画祭でドイルさんにお会いして、企画書を渡していて。監督はずっと一緒にドイルさんと仕事をやりたかったようで、ドイルさんも会うたびに「やる時は俺がやるから」と言っていたことがきっかけです。それで本当にいい流れでキャストが決まり、企画が成立したという形ですね。

――ドイル氏の撮影スタイル。

彼は事前にきっちり準備もするのですが柔軟性もあって、現場ではまず能動的に動いてカメラアングルを決め、このシーンはこういう撮り方でどうだ、と監督に確認します。監督が「うーん」となったら次のB案を直ぐに出してくる。B案も「うーん」となるとC案を出してくる。しかもA、B、C案がまったく違う手法で、似通ったところがひとつもない。4パターンくらいが常にあって、引き出しがすごいなと思いましたね。事前準備をしながらも柔軟性は抜群。自分で「こうだ！」と主張するよりも、まずは「お前らの好きなように考えてくれよ」と。それに対してどんどん球を投げていくっていう、本当にすごいスタイルです。ある意味天才ですよね。それで夕方くらいになるとスイッチが切れる（笑）。

――撮影エピソードについて。

ドイルさんは奇抜なことも色々言うんですけど、基本的には自然なものを活かすスタンス。たとえば夜の街中で撮っていて、ちょっとスペースがあったりすると、工事現場で使う投光器などを置いて画にメリハリをつけていました。歌舞伎町で撮影した時は、美術部に頼んで提灯を車に積んでいましたね。夜、ちょっと色味や光が欲しい時にお祭りの提灯みたいな感じでぶら下げて、自然にそこにあるかのように光を作っていました。言われたことをそのまま撮るのではなく、監督がフィックスと言ってもカメラの動きをつけたりとか。ウォン・カーウァイ監督との香港映画など昔は手持ちカメラでガンガン撮っていたと思うんですけど、歳をとったのかドリー機材を頻繁に使っていましたね（笑）。

――使用機材について。

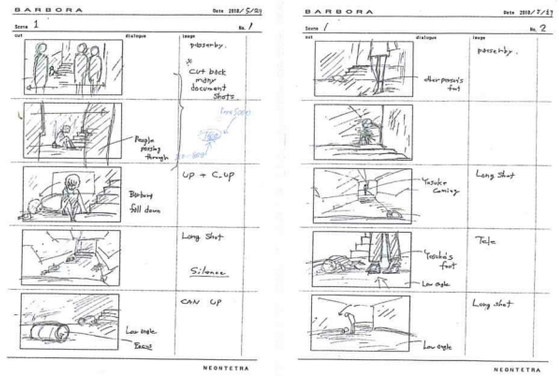
PanasonicのVARICAM LTを2台借りて2カメで撮りました。RAWデータ収録にこだわって、オデッセイというモニター兼収録機を現場で使って、その後ネガでカラコレをしています。レンズは、前の組で使っていたレンズとはまったく違う。作品に合わせてレンズを選んでいるんじゃないかと思います。特定のレンズへのこだわりはなくて、びっくりしましたね。機材にこだわらなくても絶対にドイルさんの画になるという自信があるからでしょうか。

――ドイル氏とはどんな人？

とにかくプライベートも含めて自由だなと思います。謎の女性が現場にいたりとか（笑）。お酒も大好きですね。ベジタリアンでお弁当は食べられないのでいつもきゅうりやチーズを食べていました。でも運動能力というか画のセンス、直感でガーッと動く力と色彩感覚は素晴らしい。自分の世界にとらわれないで、監督とちゃんとキャッチボールをして作っていく、共同作業をするっていうことも含めて、やっぱり素晴らしいカメラマンだと思います。彼の一番の魅力は、やっぱり境界線がないところ。多分どんな我が強い監督の作品でも、ちゃんとその映画のことを考えて自分の世界観を作り上げることができるということが最大の魅力じゃないかと思います。

監督・編集：手塚 眞

出演：稲垣吾郎　二階堂ふみ
渋川清彦　石橋静河　美波　大谷亮介　ISSAY　片山萌美／渡辺えり



上：クリストファー・ドイルの撮影ノートより。撮影前にノート数冊分のプランを作成するが、頭の中にはさらに第2案、第3案も用意されているという。
左下：クリストファー・ドイル（中央）と手塚 眞監督（右）。
右下：手持ちカメラでテスト中のクリストファー・ドイル。演技をしているのは手塚 眞監督。

STORY

人気小説家の美倉洋介は、新宿駅の片隅でホームレスのように酔っ払った少女ばるぼらを拾う。破天荒だがミューズのようなばるぼらに惹かれる美倉。彼女を手元に置いておくと不思議と小説への意欲がわくのだ。一方で、幻覚に悩まされる美倉の周囲は次第に現実離れしてゆく。ばるぼらは現実の女なのか、美倉の幻なのか。狂気が生み出す迷宮のような世界に美倉は堕ちてゆくのだった……。

CAMERA

Panasonic VARICAM LT

CHRISTOPHER DOYLE

1952年生まれ、シドニー出身。ウォン・カーウァイ監督作品『欲望の翼』（1990）、『恋する惑星』（1994）、『天使の涙』（1995）の疾走感のある映像や独自の色彩で一躍人気を得る。『楽園の瑕』（1994）ではヴェネチア国際映画祭で金オゼッラ賞（撮影賞）、『花様年華』（2000）ではカンヌ国際映画祭高等技術院賞、撮影監督をつとめた『ブエノスアイレス』（1997）は第50回カンヌ国際映画祭監督賞を受賞した。浅野忠信主演の『孔雀』（1998）では脚本、撮影、監督も行なう。最近作はオダギリジョーの初長編監督作『ある船頭の話』（2019）。

撮影監督：クリストファー・ドイル／蔡 高比　原作：手塚治虫　脚本：黒沢久子　プロデュース：古賀俊輔　プロデューサー：アダム・トレル／姫田伸也　美術統括：磯見俊裕
扮装統括：柘植伊佐夫　制作プロダクション：ザフール